

資 料

1. 平成 27 年度 班会議議事録
2. 保育現場における睡眠・情報通信機器使用 調査票

厚生労働科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業
「未就学児の睡眠・情報通信機器使用の実態把握と早期介入に関する研究」

第1回班会議 議事録

日時： 2015年10月17日13:00～16:00

場所： 愛媛県生涯学習センター

出席者： 岡靖哲，堀内史枝，伊藤一統，山本隆一郎，松原圭一，上西孝明，高田律美

1. 研究班メンバー紹介

2. 班研究の概略

班研究の概略について説明（岡）

未就学児であるため調査手法が確立されていないことから，本会議で調査の実際について再度調整を行い，各領域の幅広い取り組みを研究に生かして進めていく．

3. 資料および問診票確認

4. 3年間の予定と具体的検討事項

地域のフィールドでの横断面の調査（情報機器の暴露，0歳から5歳）

追跡調査

保健指導マニュアル作成と介入検討

で進めていく具体的内容の補足として

- ・睡眠と発達の段階での臨床的な介入（子どものこころセンター）
- ・母親のメディア接触状況と子ども・家族の関連と推移（周産母子センター）
- ・問診票中心の調査・臨床ではアクチグラフの機材を使用する．

（討議）

妊娠初期からの調査にするのか（松原） 妊娠期間は限定しない．

説明文書と同意書はどのようにするのか（松原），倫理やリクルート方法に関しては，地域ごとに共通したものがよい（山本） すでに倫理委員会に提出したものを基準として，具体的に個々の部分で議論する．

産科の臨床では入院患者も対象にしてもよいのでないか（高田）

統合失調症などの妊婦もいるが，対象者に制限はないのか？（松原） 質問紙

に回答できる人ならばよい，

（質問票についての討議）

子どもの睡眠チェックリストの説明（岡，堀内）

SDQ についての説明 4 歳から 16 歳が調査可能．2，3 歳の低年齢のバージョンはあるが，全部をカバーするより適切なものはないか検討が必要．

睡眠・情報機器使用アンケート（保護者について）は以前の調査で用いた成人用のものを改変して使用．

GHQ の使用の是非について討議．

親のメンタル尺度について，簡易の抑うつ尺度について討議

寢床の環境についての調査手法を討議．

小児科医会のパンフレットのエビデンスは十分とはいえず，これを補強する研究にならなければいけない．

発達障害の人は発達障害教育の中でのメディア使用について別のとらえ方があるのではないかと言う意見もある．

育児ストレスインデックスについて討議

検査機器はどのようなものを使用するか自律神経の機械も有用ではないか（松原） 全体の統一機器はアクチグラフで統一予定．地域での調査と臨床の共通は問診票とする．

独立変数は何とするのか（メディア使用・睡眠に情報機器の影響）．従属変数はなにかにするのか明確にするべき（山本）

未就学児の，

睡眠と情報機器の生活習慣現状と変化についての実情をとらえる．

子どもの及ぼす影響

適切な生活習慣，保健指導，適切な睡眠習慣

睡眠と情報機器に関連あることはすでにわかっている，本研究でさらに検討する課題を明確に（山本）

睡眠，情報機器の発達的变化をとらえる．

保護者のメディアについての考え方

低年齢の時点でどのような事がおこっているか．

動的变化のキャッチ，予防，介入

未就学児全体像をみないとわからないことを明らかにする．

本調査で具体化すること（岡）

睡眠の評価，

情報機器の評価

背景にある家族，母親，どういう養育をしているのか．

心身の健康に度影響するのか．全般的な健康観をみる．

臨床，地域に齟齬がないように

臨床ではすでに問題になっている子どもを見ている．

小学校からは睡眠も情報機器も親にはわからなくなる．

睡眠とストレスとの関連はわかる．

妊婦に使える適切な心理指標はどのようなものがあるのか（松原） GHQ：う

つも不安も図れる尺度として．ストレスは育児ストレスを追加してはどうか．

疫学的調査は質問項目が多いと回答率や正確に答える人が減少する（伊藤）

介入群に使うもの，共通にいれるものを区別してはどうか．

今年パイロット的に使用し，来年度にブラッシュアップしてもよいのではない
いか．継続性を考えながら，来年度に改変し本格調査とする部分があってもよ
いのではないか？

< 質問紙についての具体検討 >

地域でのフィールドバッテリーは同じ，手法の統一をみる．

子どもの状態の把握，睡眠，情報機器使用，

本人，家族（兄弟）を見る．同じ部屋にいるのか，別の部屋にいるのか．

睡眠環境 きょうだいの睡眠環境と関連する．

住居環境の問診項目は少なくする．

母子手帳で3，4ヶ月，6ヶ月，1歳6ヶ月など未就学児の一般的な発育状態が
みられる．0～2歳は把握が困難，2歳以降に個人差がでてくる．

保護者発達検査は利用できるものもある．

子どもの使い始めの時期について，親の使用環境をどう測るか．

能動的，受動的にどう暴露されているのかを把握するのか．

新生児期の睡眠：規則性，睡眠の質，量をとるのか．

発達障害の睡眠の規則性をみることは有益である．

1 日の生活状況のアンケートについて（岡）

行動評価について継続してとれるものはあるのか 2歳で一旦とって、それ以降は継続してとるという方法でよいのではないか .2歳未満はベースの神経発達とそれ以降の年齢は続けてとる .

栄養障害も子どもにとって意味があるが調査に含められないか（松原）

社会調査は独自に質問紙を作成し調査することが多い . 全体を見る視点のモデルを考える . 既存の問診票を使用すると問診項目の数が増える . 食事については食育基本法も有り意味がある . ストレスの調査も意味があるが質問紙の作り方によっては量が多くなりすぎる（伊藤）

実態把握

子どもの影響の評価：接触，時間，神経学的影響

社会的問題から反転させていくほうが，2年間に結果がだせる .

スタートアップ それ以降の研究を区別してはどうか .

インターネットアデクシオンについて（岡）

スマホの使用時間が関連している（中学生）という結果が出ている（愛媛）

メディアの使用より使用の方向性を質問したほうがよいのか .

ポータブルゲーム機（小学生）（伊藤）

2歳未満はテレビの暴露についての提言（アメリカ小児科学会 2011年）：子どもの寝室にテレビを置かない（山本）

親のメディア暴露のモデルを考え質問紙を追加しては（伊藤）

妥当なものにしぼるのは先行研究があまりないので，フォーカスグループとしてこれを調査すると確定してもよいのでは（山本）

物理的デバイスに特定する . 問診票内容を検討（伊藤）

親の仕事や勤務状況，片親，主婦などではどうするのか（伊藤）

CASCの中で家族構成がわかる聞き方をする .

子どもの問診：CASC，メディア，インターネット

親も睡眠，メディア，GHQ，インターネット依存（他のものを検討する .）

親の心理：GHQ以外にどうするか .

GHQは購入する . SDQは使用はフリー

CASCは回収率70%~50%である（山本）

愛媛では80%で地域差がある（岡）

調査手続きはどうか．保育園，幼稚園，コミュニティーか．
調査会社に依頼する方法もある．横断調査としてはよい．
縦断調査ではどうか．
保健センターか，母子進委員での配布を予定している（伊藤）

5．予算について

1月までに今年度分は執行するように立案を．
海外出張については事前申請．
来年度以降の出張については1月までに知らせる．

6．次回以降の開催予定

次回の班会議も愛媛で予定する．
今後東京での開催も検討する．
成果報告としてシンポジウムをすることも検討する．

7．今後の連絡方法

メールでのやりとりで内容の検討を深める．